

長期的視野に 立った選手の育成

「長期的視野に立った選手の育成」。これは、JFAがユース育成に掲げている、非常に重要な考え方です。

目先のその時々の勝利ではなく、一人の選手が自立期においていかに大きく成長するのかが第一の目的とする。人間の器官・機能の発達速度は一様ではなく、子どもは大人のミニチュアではない。ある課題に対して吸収しやすい時期としにくい時期がある。最も吸収しやすい時期にその課題を与えていくことが、その選手を最終的に一番大きく成長させることにつながる。ということです。

そのために、「一貫指導」の必要性をうたっています。これは何も、一貫校や一貫した複数のカテゴリーを含むクラブなどでなくてはできない、という意味ではなく、日本の指導者全体でこの考え方を共有し、種別を越えて選手が、チームや指導者が移り変わっていく中であっても、皆がその選手の将来、全体像を意識してそれぞれの担当の年代を指導していただきたい、という「考え方」です。

大きな絵、全体像を完成させていくために、一人の選手が成長していく過程で、多くの指導者がかかわり、リレーをしていく。それぞれの年代がその年代に適した形で充実しているほど、最終的に大きく輝くことができる。そのことを、携わる指導者全員が意識しておくことが大前提となります。

そのためには、発育発達上の年代別の心身の特徴を知っておくことが大切で、指導者養成にも必須の内容として盛り込まれています。発育発達上の特徴があるからこそ、この考え方が必要になるのです。勉強し、頭には入っている、日々ある特定のカテゴリーのチームを指導していく中にあるは、なかなか実践しがたいものかもしれません。

JFA技術委員会は、各年代別の指導指針を作成し提示しています。2000年までは一つのものを出していましたが、2004年には、U-6からU-16まで、2歳刻みの指導ガイドライン、指導指針を出しました。それは、年代に応じてそのときにすべきことをする、という点を強調したかった



2006 FIFAワールドカップのテクニカルスタディを踏まえ、今年度新たな指導方針が発表される。
/ネンリンチャレンジカップ2006・日本vsフィンランド⑥ Jリーグフォト(株)

からです。

その一方で、全体像を知ってほしいと考えます。全体像を知った上で、ご自分の担当の年代の指導にあたっていただくのが理想と考えています。全体像の中の部分としての特定の一段階としてのその年代、という認識を持つことが、長期的視野にたった選手の育成、という考え方のスタートポイントとなるのです。ですから、他の年代の指針にもぜひ関心を持っていただければと思います。

さらに、2004年からは、U-12、14、16の指導指針は、最新の世界大会のテクニカルレポートを踏まえ、2年おきに発刊することとしています。もちろんベーシックな部分は大きくは変わらないと思われませんが、世界のトップ10を目指す上で、世界のトップのサッカーのトレンドを把握し、それに向けての課題の克服、改善を具体的に目指すものであるべきと考えるからです。その中には短期・中期・長期の課題があります。ですから、U-16、U-14、U-12ですべきことはそれぞれ異なるのです。そのためのJFAとしての指針を示すのがこれらの各年代指導指針です。

2006年は、新たな指導指針を出す年に当たります。2005年の各カテゴリー世界大会、そしてFIFAワールドカップのテクニカルスタディ等を踏まえ、今年度の後半に出していく予定です。

ぜひ、ベクトルを共有していただき、年代に応じて、短期・中期・長期的に課題の克服に日本全体で共に取り組んでいきたいと考えています。